

炎流れる彼方 船戸与一

ほのおなが
炎流れる彼方

一九九〇年七月二五日 第一刷発行
一九九〇年九月一〇日 第三刷発行

著者 ふなど よいち
船戸与一

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

郵便番号 一〇一―一五〇

編集部 (〇三) 二三〇―六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇―六三九三

製作課 (〇三) 二三〇―六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛てにお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

第一の譜

そして夜霧が妖しく街を包み

7

第二の譜

そして札束が淫らに舞い交い

85

第三の譜

そして宿命のゴングが鳴った

191

第四の譜

そして今宵も影たちが忍びより

254

第五の譜

そして敗者にもせめて花束を

336

第六の譜

そして炎の流れゆくあの彼方へ

393

装丁 亀海昌次

炎
流れる彼方

エビグラム

むかし、フランコ總統がまだ生きてたころ、スペインのあちこちを歩きまわったことがある。アンダルシア地方のある町でかつてアナーキストだったという盲目の老人に出遭ったのもそのときだ。「語るがいい、若者たちよ、きみたちは未来について」薄暗い酒房のなかでその老アナーキストは何度もこの言葉を繰り返した。「だが、わたしは過去を語る。何が起き、何が起らなかったかを」。これから繰り返ひろげられるささやかな物語はしかし、アンダルシアを舞台にしてるわけではないし、五十年以上もまえのスペイン内戦に材を得てるわけでもない。一九八八年の北米大陸にひっそりと咲いた月見草のおぼろな夢である。

第一の譜 そして夜霧が妖しく街を包み

I

揺れる、揺れる、紫煙が揺れる。

ロックンロールが揺れ動く。

だが、そんなことはどうでもいい。

背後から羽交い締めを受けながら、おれは肚^{はら}のなかで何度も何度も同じことを吼^{こゑ}えつつづけていた。そうだ、ギャッツビー、その腕を離さないでくれ、でないと、おれはほんとうにやつを殴り殺しちまう！ 筋肉は勝手に躍動しようとしているが、それでも頭の片隅では理性がまだすこし残っていたのだ。だから、おれは本気でギャッツビーの腕を振りほどこうとはしなかった。

「やらせてみなよ、ギャッツビー、その日本人に」カウ
ンターのほうで聞き覚えのある声があったが、だれだかは
わからなかった。「いくらその日本人が興奮してても、
殺し合いにまではなりやしねえだろうからよ！」

「無責任なことを言うな」

「退屈しのぎだよ、ギャッツビー」

「黙らないと、あんたらも追いだすぞ」

揺れる、揺れる、紫煙が揺れる。

酒場《ブラック・キャット》

のなかで朝霧のように漂ってる紫煙
が揺れる。古めかしいジュークボックスから流れてる一
九五〇年代のロックンロールが揺れつつづける。

ジェイク・ヘシオドスは立ちこめるその紫煙のなかに
いた。年代物の丸いテーブルの向こうに腰をおろし、バ
ーボンのグラスを舐めながらこつちを眺めていた。

おれもバーテンダーのギャッツビーに羽交い締めを食

らったまま、やつを睨めつけている。ジェイク・ヘシオドスの動揺をひた隠しにしてるその眼を。五〇年代の調度品ばかりを集めたこの酒場にはいつてきたとき、顔見知り、六、七人ほどだった。いまはもっと増えてるかも知れない。

ジュークボックスのロックンロールが鳴り熄んだ。それとともに、ぷすぷすと音を立てながら泡立っていたような脳髓が急速に鎮まってくるのをおれは感じた。同時に、いきり立っていた全身の力も抜けてきた。おれは小さな空咳をひとつした。それから、背後のギャッツビーに向けて声をかけた。

「もういいよ、ギャッツビー、わかったよ。いいから、その腕を離してくれ」

「暴れないか、絶対に？」

「約束するよ」

「もし暴れたら警察を呼ぶことになるぞ」

「言ったらう、約束すると」

背後の腕がそこようやくほどかれた。ぶ厚い胸の肉が背なかから離れていった。おれはその場に突っ立ったまま動きはしなかった。ギャッツビーの足音が板張りの床を歩き、カウンターの向こうに潜りこむ気配がした。だが、ビールの注文する声が響いたあとで、四十半ば

のバーテンダーがこっちに向かってこう言うのが聞こえた。

「いったい、どうしたと言うんだ？ まったく珍しいな、ラッキー、あんたがこんなに興奮するなんてはじめて見るよ」

「よく知らないんだよ、おれを」

「長いつきあいのつもりだがな」

「かっとしやすいい性質なんだ、おれは」

「何をしたというんだ、ヘシオドスが？」

おれはその質問には答えなかった。黙って胸のポケットから煙草を取りだし、それに火を点けた。紫煙を大きく吸いこんでから、あらためてジェイク・ヘシオドスを睨みつけた。

「何だってこんなやつをここに入れるんだ、ギャッツビー、見たろう、はいってきていきなりおれに向かって唾を吐きかけやがったのを？」ヘシオドスの声がカウンターのほうに向かって飛んだ。こっちに貼りついたままの視線には明らかに安堵めいた色が滲みはじめていた。「何のためにこのおれに突っかかってきたのか見当もつかねえよ。頭がぶっ壊れてるんだ、この日本人はきつとこういうやつは精神病院かどこかにぶちこまなきゃならねえ。でないと、ふつうの市民はたまったものじゃねえ

よ」

おれは何も言わずに銜え煙草のまま、ゆっくりと足をまえに踏みだした。嫌煙権運動がますます活発になりつつあるこのシアトルで、この酒場ほど紫煙がもうもうと渦巻いてる場所是他にはあるまい。ギャッツビーが嫌煙権運動に剣きだしの憎悪を表明していて、禁煙者入場拒否の手書きのポスターを表の扉に貼りつけているからだ。その紫煙の波のなかでヘシオドスの上半身がびくりと動いた。こつちがふたたびテンプルに近づこうとは思ひもしなかったらしい。おれはギャッツビーにバーボンのストレートを注文してヘシオドスの向かいに腰をおろした。「静かに話そうじゃないか、ヘシオドス、静かにな。おたがい低声でよ」

「な、何をよ？」

「ビリーはどこだ？」

「知らねえと言ったはずだ」

「どこへやった、ビリーを？」

「知らねえものは知らねえ」

「ビリーはどこだ？」

「いいか、言っとくがな、あんまりしつこいと、このおれにも我慢の限度つてものがある。いつまでもくだらなくまとわりつきやがると、ただじゃおかねえぞ」

「ただじゃおかねえだど？」

「このおれを舐めねえほうがいい」

「どういう意味だ、そいつは？」

ジェイク・ヘシオドスは黙って煙草に火を点けた。言葉に窮したのだ。五十を越えたばかりのこの痩せたギリシア系は、ここに来たときはわざと乱暴な言葉づかいをするが、それが虚勢であることはわかっている。本職はシアトルのあの名門ホテル、デラウエイズのルームサーピスなのだ。ふだんは慇懃さが売り物だった。たぶん、この酒場《黒猫》に繁く足を運ぶのはいつも宿泊客にへいこらしてなきやならないじぶんを瞬時でも忘れたいからだろう。ここに來て横柄な態度でバーボンを飲むと、じぶんが飼ひ慣らされた存在じゃないと思えるらしい。ヘシオドスは紫煙を吐きだした。その唇の動かしかたもわざと野卑な印象をまわりに与えたがっているかのように見えた。

「説明してもらおうじゃないか、ヘシオドス、おまえを舐めたらいったいどうなるんだ？　ただじゃおかねえとはこのおれをどうするつもりだ？」

返事はやはり戻ってはこなかった。

ヘシオドスがこつちを怖れてることは最初からわかっている。おれがどういう状態でシアトルに流れついてき

たかを眼のまえにいるギリシア系はもちろん知っていた。交遊関係はきわめて限られてるし、踏みつぶされたってどうってことのない立場だ。しかし、それでも本気でいがかみあう気にはならないだろう。肉体的にはウエスタン街の少林寺拳法スクールで教師をやってるこのおれに對抗できるはずもないし、かと言って、拳銃を使ったり、然るべき組織に血腥いことを依頼できるほどの度胸もない。

要するに、ジェイク・ヘシオドスは小銭欲しさの悪さをこそそこそとやらかし、この酒場に来ては気晴らしに無頼めいた素ぷりを演じてみせるのがせいぜいの小心者なのだ。さっきこっちが逆上したとき、何も言わずにバーボン・グラスを舐めつづけたが、あれはおそらく精一杯の演技だったろう。堰を切ったような胸の高鳴りに、隠していた怯えはまさに弾ける寸前だったにちがいはあるまい。

「おまえががきどもを引き込んで小銭を稼いでるのはもうわかってるんだ。いくら白ばっくれようと、ちゃちな脅し文句を並べたてようとな」

「な、何をしてるというんだ、おれが？」

ギャツビーがそのときバーボンのグラスを持ってきた。でっぷりと太ったこのバーテンダーとはシアトルに

着いてからすぐのつきあいだ。親近感はもちろん持っている。だが、実を言うと、ギャツビーという呼び名以外にはほとんど何も知らない。それが苗字なのか名まえなのか、それとも渾名なのかも。年齢はたぶん四十半ばだろう。そのギャツビーがヘシオドスとこっちをいったん交互に眺めまわし、それからグラスをテーブルに置いてカウンターに戻った。

おれはその琥珀の液体を一気に喉のなかに流しこんだ。最初から味わう気なんかなかったからだ。ヘシオドスがおどおどした眼でこっちを見ている。おれは空になったグラスをわざとぶつつけるようにしてテーブルに置き、すこしだけ声を強めて言った。

「これが最後の最後だ、ヘシオドス、もう一度だけ訊くぞ。おまえはバーリーをどの部屋に送りこんだ？ 答えるつもりがなきゃ、おれはこのままここから引きあげる。すこしばかり時間はかかるが、ちっとばかり柄の悪い方法を使いさえすりゃ、バーリーを探しだすなんて簡単なことだからな」

「柄の悪い方法だと？」

「そして、一番、確実な方法だよ」

「どんな方法だ？」

「おれはかたっぱしからすべての部屋の扉を叩いてみる

さ。それから、十七歳の^がきを^くを^くえこんだ^{めす}雌豚の部屋は

ここかと喚きたててやる。すぐにフロント・マネージャーがすつ飛んでくるだろうさ。名門ホテル、デラウエイズの評判ががた落ちになるからな。そこでおれはおまえがやってることをマネージャーに喋り、ビリーを見つめるまでは絶対にやめないと喚き立ててやる」

「警察にしょっぱかれるぜ、営業妨害で」

「かまわねえさ、せいぜい四、五日、拘留所で眠るだけのことなんだからな」

「できやしねえよ」

「何が？」

「部屋の扉を叩いてそんなことを喚くなんて」

「勝手にたかを括^{くく}るがいい。おまえが喋らないかぎり、おれにはそうするより他に方法がないんだ、不粹^{ぶそ}なやりかたは好みじゃねえがな」

「ま、待ちなよ」

「おまえには気の毒なことになる。フロント・マネージャーが出てきて、おれが知^しってることを喋りゃ、どうなる？ 即刻、おまえは^め首^びさ。わかるだろう、長年勤めてきた職場を失うだけじゃない、おまえのささやかな小遣い稼ぎもそれで完全に終わりというわけだ。これからすぐにでも新しい仕事口を探しまわったほうがいいだろ

うよ」

「待てと言ってるんだよ」

「どこにいる、ビリーは？」

「喋るよ、しかし」

「何だ？」

「そのまえに教えてもらいたいことがある。どうしてわかったんだ、おれがそういうことをやってることが？」

「クラック（^{コカインに重曹を混ぜた安}価で即効性の強い幻覚剤）さ」

「何だって？」

「おまえの商品のひとりチコがな、クラックで夢心地になつててよ、ぺらぺらとみんな喋ってくれたんだよ。が、きどもはおまえから渡された金でたいいクラックを買いに走るらしい」

ジェイク・ヘシオドスは黙って灰皿のなかで煙草を揉み消した。眼のしたの筋肉がびくびくと二度ほど顫^{ふる}えた。じぶんのやってることが麻薬にまで関連していくとは想像もしてなかったらしい。痩せこけた頬をしきりに撫でまわしはじめた。

「差しでがましい口を利くのはおれには似合っちゃいない。しかし、ヘシオドス、こいつだけははっきり宣言しておくぜ」

「な、何を？」

「おまえがどんな悪さをしようと、おれの知ったことじゃない。だが、今後もしりり巻き込むようだったら、おれはかならずおまえの腕をへし折る。ビリはおれのスクール・ボーイだし、やつのおやじとは特別な関係だ。そいつはおまえも知ってるだろう？」

「あ、ああ」

「約束できるな？」

「わかったよ」

おれは右腕をかざしてギャッツビーを呼んだ。その太った体がゆっくりとテーブルに近づいてきた。酒場のなかはさつきよりも客が増え、紫煙がさらに深く濃く漂っている。おれも新たな煙草を取りだした。それに火を点けてからギャッツビーに言った。

「バーボンをダブルでひとつ。ヘシオドスに奢^{おご}りたいんでね」

「あんたは飲まないのか？」

「今夜はおれはまだ酔っぱらえない」

「何でだい、ラッキー、きょうはあんたの誕生日じゃなかったか？」

「三十二回目のね」

「それなら飲みなよ、おれが奢るよ」

「いろいろ事情があるのさ、今夜はな」

「わかったよ、それなら無理には勧めないよ。しかし、とにかく、よかったな」

「何がだい？」

「ふたりとも仲なおりをしてくれて」

「そんな程度じゃないよ、ギャッツビー、おれとヘシオドスとはいまじゃ大の親友というわけさ。こっちの訊きたいことは何でも喋ってくれるそうだからな」

2

時刻は八時半をまわっている。だが、五月のシアトルはもちろんまだ暗くはなかった。この季節、完全な闇は夜の十時を過ぎないと訪れはしないのだ。おれは酒場『ラック・キャット』を出てマジソン通りの坂を登っていった。『黒猫』を。濃霧が街に立ちこめている。それに遮られるとはいえず、陽光はいまも西の空にあるのだ。その薄ぼんやりとした明るさに点灯されてる街のイルミネーションが実に弱々しい。

マジソン通りから十七番街にはいり、おれはデラウエイズの前庭に足を向けた。エントランスには金モールの

制服を着たふたりのドアマンが立っている。言葉は交わしたことはないが、どちらも顔見知りだ。おれは眼でふたりに会釈して回転扉のなかに体を滑りこませた。

エレベータで八階まで上がり、八〇七号室のままで足を停めてハンカチーフを取り出した。その半分を口のなかに押しこんで扉を叩いた。声を変えるためだ。すぐには返事はなかった。だが、部屋の中かの人間の気配は濃厚に伝わってきている。さらにはげしく扉を叩きつづけた。

「だれよ、何なのよ、いったい？」　ようやく扉の向こうから響いてきた女の声は実に不機嫌そうだった。「部屋をまちがえたんじゃない？　この部屋じゃルームサービスには何にも頼んじやいないわよ」

「ルームサービスじゃありません」

「だったら、何よ？」

「部屋のなかは何ともありませんか？」

「何のことよ？」

「安全管理室の火災探知システムが点滅してるんです。この部屋の異常を示しながら」

「異常なんかあるわけないわ。あたしは煙草も喫わないんだし、探知機にけむりが反応することもないわ」

「しかし、一応、点検しないと」

「お断りするわ」

「規則なんです、申しわけありませんが」

女がこの言葉に黙りこみ、ベッドから起きあがる気配がした。おれは口のなかに押しこんでいたハンカチーフを引き抜き、ポケットにしまいこんだ。足音が近づいてきた。ドアチェーンを外す音が響いた。把手がひねられ、オートロックが解かれた。扉が開いた。戸口に四十過ぎの女が立っていた。

おれはすばやく扉の隙間に靴先を突っこんだ。女の顔が一瞬、引きつった。スペイン系かイタリア系かはわからない。だが、とにかく、女はラテン系だった。眼のしたにくまができてる。黒髪はかすかに濡れていた。バスローブに包んだ小太りの体が一步、あとずさった。おれはそのまま部屋のなかに踏みこみ、背後の扉を閉めきった。

「現金はたいして持ち合わせちゃいないわ、あいにくだけど」女は震える声で言って、またあとずさった。「ほんとうよ、大きな買物はカードでしかないから」

おれは黙って突き進んだ。女がベッドから起きあがる気配がしてから戸口に近づくまでかなり間があったのはなぜなのかはすぐにわかった。この部屋は二間つづきののだ。居間には贅を凝らした調度品が置かれている。寝

室はいまの位置からは見えないが、居間の右側にあるの
だろう。女がまたあとずさる。おれはそれを追うように
足を運んだ。

「す、すぐに持ってくるわ」

「何を？」

「寝室に置いてあるのよ、ハンドバッグが。そこからお
金と指輪とイヤリングをよ。保険がかかっているから平気
だわ、あたし、指輪もイヤリングもずいぶん高いものだ
けど」

おれはその言葉を無視して居間に踏みこみ、視線を右
側に向けた。居間と寝室のあいだには扉はなかった。金
糸のフリンジのついた真つ赤なビロードのカーテンがそ
こを仕切るのだ。しかし、それは引き開けられたままに
なっていて、その向こうの寝室のなかは居間からまる見
えだった。そつちに眼を向けたとたんに、脳髓がまたぶ
すぶすと泡立つような気分になってきたが、おれはすぐ
には動きはしなかった。

寝室にはキングサイズのダブルベッドが置かれている。
そして、そこにビリーが横たわっていた。ビリー・ヘム
ロックが毛布にくるまってこつちを見ていた。その青い
眼に浮かんでるたじろぎはすさまじかった。こんなとこ
ろでこのおれに会うなんて想ってもいなかったらしい。

「とにかく、早く持って行ってちょうだい、お金と指輪
とイヤリングを！」女がそう言って寝室のなかに飛びこ
んだ。「それから、すぐにここから出て行って！ お金
はたいしたことないけど、指輪とイヤリングは売ればか
なりの額になるわ！」

「誤解してもらいたくないな」

「何ですって？」

「おれはここに強盗に來たわけじゃない」

「そ、それじゃ何しに來たのよ？」

おれは女には答えず寝室のなかに足を踏み入れた。ビ
リーは相変わらずベッドに横たわったままだ。その眼に
浮かんでるたじろぎはいっこうに消えそうもない。おれ
は胸のポケットから取りあえず煙草を取り出した。全身
でとぐろを巻きかけてる興奮を抑えるためだ。ゆっくり
と煙草を銜え、それに火を点けてから言った。

「降りろ、ビリー、ベッドから」

「ど、どうしてここが？」

「そんなことはどうでもいい。さっさとベッドから降り
な」

「命令される憶えはねえよ」

「何だと？」

「あ、あんたから命令される筋合いはねえと言ってるん